

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月4日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2011～2012

課題番号：22520724

研究課題名（和文） インドネシア・ムスリム諸団体の日本のイスラーム政策への対応とそれぞれの運動の展開

研究課題名（英文） Indonesian Muslims' response towards Japanese Islamic propaganda and their further development

研究代表者

小林 寧子（KOBAYASHI YASUKO）

南山大学・外国語学部・教授

研究者番号：60225547

研究成果の概要（和文）：オランダ植民地支配期末期から日本軍政期にかけてのインドネシア・ムスリムの動向を、その出版物（特に新聞・雑誌）、植民地政府の報告書と付き合いながら再検討するための資料収集を行った。資料はまだ読み込んでいる途中であるが、特に1930年代について従来の研究に対して次の2点で新しい知見を提供できる。第1に、イスラーム系メディアには国際情勢（中東、ヨーロッパ、東アジア）に関する記事・論考が写真入りで多く掲載されており、今までほとんど論じられなかったムスリムの国際関係認識が明らかにできた。第2に、ナショナリズムとイスラーム、植民地議会設置に関する議論が多く、民族独立運動にほとんど役割を果たさなかったとされてきたイスラーム運動体が、実は植民地末期には大きな関心を寄せていたことが判明した。また、日本軍政期に関しては、イスラーム工作と関わったBeppan（別班）関係者の尋問書はあったが、イスラーム工作に関する証言はきわめて少なかった。

研究成果の概要（英文）：The 1930s have long been considered to be relatively unimportant in the modern political history of Indonesia since the nationalist movement was forced into stagnancy through the oppressive actions of the Dutch colonial government from the mid-1920s. Furthermore, Muslim organizations were thought to have contributed little to the political development towards independence. However, when we look into the periodicals published by self-conscious Muslims in the 1930s, we obtain a quite different view. These periodicals not only provided religious knowledge and information on the activities of Muslim organizations, but also domestic and international news with photographs. Especially just before the Japanese occupation, there were a lot of articles and reports concerning the problem of establishing a parliament. From the contents, we can see that the emerging Muslim middle class was the primary audience of these periodicals as well as an indication of the burst of political and social activity appearing within the Muslim middle class community in Indonesia during this period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：東南アジア史、イスラーム、対イスラーム政策

### 1. 研究開始当初の背景

現在インドネシアはムスリム民主主義大国としても知られるようになったが、この国にはいくつものイスラーム団体が植民地期から活動を展開している。それぞれの団体は、行政の中心となるジャワとそれ以外の地域を結び付ける役割を果たしたり、また都市中産階層と農村住民をつないだりして、市民社会の土台をつくりあげてきた。しかし、インドネシア史研究においては、イスラーム系団体の活動は民族主義運動の政治的展開の中には位置づけられず、イスラーム知識人の関心は宗教問題に限られると考えられてきた。現在に至るまで、時代の要求に対応して自己革新を繰り返すそのダイナミズムに改めて着目する必要があると考えた。

### 2. 研究の目的

本研究は、インドネシアのイスラーム運動が政治化する1930年代と40年代に着目し、ムスリムが当時の国際情勢（特に東アジア情勢と日本の対イスラーム政策）をどの程度把握していたのか、また特に、日本の対イスラーム政策にどのように対応したかを明らかにすることを目的とした。資料として、定期刊行物を重視したが、それはこの時代のイスラームに関する研究が植民地文書中心で、ムスリム自身の「声」に耳を傾けることが少なかったからである。植民地文書とムスリム自身の出版物を突き合わせて、ムスリム側の主体的な動きを浮かび上がらせる。

### 3. 研究の方法

資料収集は、1) KITLV (Koninklijk Institute van Taal-, Land- en Volkenkunde 王立言語地理民族学研究所、ライデン)、2) NA (National Archief 国立文書館、ハーグ)、3) PN (Perpustakaan Nasional 国立図書館、ジャカルタ)で行った。KITLVとNRAに関しては、ネット検索で資料の目星をつけてから調査に赴いた。なお、PNの場合はすでに出版されているカタログで事前に実見する資料を探しておいた。

KITLVでは、1930年代を中心に主にIPO (原住民新聞雑誌および中国人マレー語新

聞雑誌記事摘要)にくまなく目を通し、それぞれの時期の掲載記事に注目し、KITLV所蔵の新聞・雑誌を一部または全部を複写した。

NAにおいては、秘密報告 (Geheim) カタログ (マイクロ) で、日本とインドネシア・ムスリムに関する問題をチェックして、Verbaal (一件の問題につき、関係文書がひとつの束になっているもの) に行きつく方法をとった。一方、カタログでは、「イスラーム、日本」をキーワードにして検索をかけて、文書番号に辿りつく方法をとった。

なお、もう一か所予定していたNIOD (戦争文書館、アムステルダム) へは行けなかったが、本科研の前年2009年8月に行った予備調査で概要を把握しており、別の機会に実際の調査を行いたい。特に占領期に関して、NAの補完となる資料の確認が必要である。

また、闘争期に関する資料はNAに所蔵されているのを確認したが、その有用性を確認するまでには至らなかった。

### 4. 研究成果

#### (1) 収集資料

収集した資料は、1930年代から1940年代初頭のイスラーム系定期刊行物と、植民地文書に分けられる。

#### 1) イスラーム系定期刊行物

1930年代のIPOの情報に従うと、イスラーム系の定期刊行物は、そもそも宗教系雑誌として分類されたものと、専門誌あるいは一般誌その他に分類されたものの中で特にイスラーム系と分類されるものを合わせることができる。1930年代は植民地政府の弾圧で急進的政治活動は抑圧されたとされているが、表の通り、多くの定期刊行物が出版さ

れ、特に後半はその数は増えている。イスラーム系出版物はそれを上回るペースで増加しているが、目立つのは、特定の団体・組織と関わりがある機関誌的な性格のものよりも、一般購読者をめざした定期刊行物が多くなっていることである。識字率の増加を背景に出版文化の隆盛が顕著である。

#### 1930年代定期刊行物とイスラーム系雑誌

リスト日付	定期刊行物総数	宗教系中のイスラーム系雑誌	他分類におけるイスラーム系雑誌	イスラーム系紙誌総数
1930/9/15	239	22 (12)	10 (9)	32 (21)
1931/3/14	261	25 (12)	16(14)	41 (26)
1931/6/20	258	25 (13)	16(13)	41 (26)
1931/9/30	242	24 (15)	14(13)	38 (28)
1933/1/7	262	22 (16)	10 (9)	32 (25)
1933/3/31	280	30 (20)	12(12)	42 (32)
1934/3/3	288	27 (16)	12(12)	39 (28)
1935/7/13	360	53 (20)	10(10)	63 (30)
1937/8/16	470	66 (25)	14(14)	80 (39)

出典：IPO（1930, 1931, 1933, 1934, 1935, 1937年）より、筆者作成

（ ）内の数字は特定の団体・組織との関わりが認められる刊行物の件数。

イスラーム系定期刊行物の出版地として注目されるのは、メダン（北スマトラ）と、ソロ（中部ジャワ）であり、『ブドマン・マシャラカット』『パンジ・イスラーム』『デワン・イスラム』『アディル』『イスラム・ラヤ』などが、その代表としてあげられる。いずれも複写をしたが、破損や欠号があり、残念ながら完全ではない。しかし、これらの定期刊行物は今までの研究では一部しかあるいはほとんど使用されておらず、当時のイスラームの関心事を知ったり、「イスラームの声」を聞いたりするのに有用である。

#### 2) 植民地文書

「秘密報告」の中では、1939年にインドネシアのイスラーム代表団が日本の回教展覧会に招待されたときに、代表団の動きを派遣前から派遣中まで追った文書が発見された。オランダ側はバタヴィアのみならず、中国、東京の出先機関と綿密な連絡をとっており、特に、イスラーム専門家による数々の報告書（提言書）は、当時のオランダのイスラーム理解を示すものとして興味深かった。

カイロにあるオランダ代表部は、インドネシア人留学生の動向を逐次観察・記録していた。また、パレスチナ問題にインドネシア人が関与するのを警戒し、他の列強の大使館（イギリス、フランス）とも情報交換を行っていた。現在にいたるまでインドネシアでパレスチナ問題に対する関心が高いが、このカイロのインドネシア人留学生の活動が起点になっていると言ってよい。在カイロ留学生からインドネシアのイスラーム系定期刊行物に評論文が寄せられることもしばしばで、中には日本のプロパガンダに対する警告を発したものもある。

#### (2) 戦前日本のイスラーム工作への対応

イスラーム側は自分たちがプロパガンダの標的になっていることを十分認識しているが、日本側の招待来日に対しては、運動体（あるいは指導者）によって多少異なる対応を見せた。拒否、あるいは実見して日本側の意図を確かめるというもので、出発前の動向からは、当時のイスラーム指導者と、植民地政府のイスラーム専門家（原住民問題顧問官など）が連絡を取り合い、腹の探り合いをしていることも明らかになった。占領期のイスラーム指導者の日本軍政に対するしたたかな姿勢には、この戦前の経験が生きていると言ってよい。

#### (3) 今後予定される論考

今後は、収集した資料を用いて、以下のよう  
な問題について論文を執筆する。

(1) 「パレスチナ問題とインドネシア・ムス  
リム」

1931年のエルサレムでの世界ムスリム会  
議には、エジプトに留学中のインドネシア人  
学生も参加した。パレスチナ問題は1930年  
代を通して、最も多く報道された国際問題で  
あり、ムスリムの国際連帯の原点とも言える。

(2) 「イスラームとナショナリズム：植民地  
議会設置問題との関わりで」

イスラーム系定期行物では、中東諸国の  
動向は常に大きく取り上げられたが、同じム  
スリム国が近代国家／民族国家をどのよう  
に建設するかに関心がもたれた。1930年代  
末、緊迫する国際情勢の中、議会設置問題が  
白熱するのもその関連である。

(3) 「インドネシア・ムスリムの日中戦認識」

日本については、多くは日中戦絡みでとり  
あげられた。日本に留学しているインドネシ  
ア人学生の寄稿文もイスラーム絡み（在日外  
国人ムスリム、東京モスク開堂など）で掲載  
されたが、日中戦における日本軍の残虐行為  
を払拭するような印象は与えていない。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に  
は下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

①□小林寧子、「1930年代オランダ領東イ  
ンドのイスラーム系定期行物：『ブドマ  
ン・マシヤラカット』を中心に」小林寧  
子編著『アジアのムスリムと近代：1930  
年代出版物から考える』（SIAS ワーキン  
グ・ペーパーNo.19）、pp.49-69. 2013年、  
査読無

②□Kobayashi, Yasuko, “The Development  
of Studies on Islam in Indonesia:  
Towards a Combination of Area Studies

and Islamic Studies”, *Acta Asiatica*  
(Bulletin of the Institute of Eastern  
Culture) No.104, 2013, pp.99-120. (依  
頼論文)

③□小林寧子、「日本のイスラーム・プロパ  
ガンダとインドネシア・ムスリム」和田  
春樹他編『岩波講座 東アジア近現代史  
新秩序の模索 1930年代』第5巻、2011  
年、pp.173-194、査読無

④□Kobayashi, Yasuko, “Ulama’ s Changing  
Perpectives on Women’ s Social Status:  
Nahdlatul Ulama’ s Legal Opinions”,  
Ota Atsushi, Okamoto Masaaki, and  
Ahmad Suaedy (eds.), *Islam in  
Contention: Rethinking Islam and State  
in Indonesia*, Jakarta: The Wahid  
Institution, 2010, pp.285-318、査読無

⑤□小林寧子、「東南アジア・イスラームの  
展開」小杉泰編『イスラームの歴史 2』  
山川出版、2010年、pp.203-240、査読無

〔学会発表〕（計5件）

① 小林寧子、「日本の回教工作の展開と帰  
結：インドネシアを中心に」新学術領域  
研究「ユーラシア地域大国の比較研究」  
第4班研究会“戦時期日本の喇嘛・回教  
工作” 2012年12月1日、東京理科大学

② 小林寧子、「1930年代インドネシア・ム  
スリムの国際関係認識——イスラーム系  
定期行物から探る」NIHUイスラーム地  
域研究上智大学拠点「東南アジアムスリ  
ムと近代」ワークショップ「アジアのム  
スリムと近代：1920～30年代の出版物を  
資料として」2012年1月29日、上智大  
学

③ 小林寧子、「ナフダトゥル・ウラマー第  
32回全国大会における「伝統」言説」NIHU  
イスラーム地域研究上智拠点グループ2  
「東南アジア・イスラームの展開」研究  
会、2010年11月14日、上智大学

④ 小林寧子、「日本のイスラーム・プロパ  
ガンダとインドネシア・ムスリム」東南  
アジア学会中部地区例会、2010年10月9

日、名古屋大学

- ⑤ 小林寧子、「ナフダトゥル・ウラマー再考：第32回全国大会における「伝統」の表象と言説」東南アジア学会九州地区例会、2010年5月29日、九州大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 寧子 (KOBAYASHI YASUKO)

南山大学・外国語学部・教授

研究者番号：60225547

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし